

## 保育者・教員養成課程における自然体験活動の有効性

### Effectiveness of Nature Experience Activities in Childcare and Teacher Training Programs

谷 昌代

#### 要旨

近年、自然の中での保育が注目されている。本稿は子どもの非認知能力を育むことができる保育者・教育者の質を学生たちによる自然体験活動の過程とその気づきから検討した。偶発的に起こる事象から感情が揺さぶられ仲間の姿から多様さを受け入れる姿が見られ、子どもを見守り支える質を考える機会として自然体験が有効であると示唆された。

**キーワード：**自然体験 (nature experience)／非認知能力 (non-cognitive abilities)  
教員養成課程 (teacher training programs)

#### I はじめに

近年、乳幼児及び児童への虐待が社会問題となっている。その背景には、現代の核家族化により身近に育児に関することなどを相談できる相手がいないこと、地域社会における人間関係の希薄化などがある。また、グローバル化が急加速で発展する一方で、人と人との直接的な関わりの場が減少し、一家族、一個人の孤立化を余儀なくされ、子育て家庭も孤立しやすい状況にあるといえよう。

かつての狩猟時代から、人は群れをなして獲物を求めて移動し、村単位で子どもを育てていたことがヒトの社会性の起源であったとも言われるが、現代はもはや共同で子どもたちを育てることが成立しにくい環境である。よって、冒頭に述べた虐待問題は、乳幼児を育てる養育者個人の問題に起因するだけでなく、社会全体の問題だといえるだろう。

さらにこれからの日本はますます高齢化に拍車がかかり、AIをはじめとする様々な発展を遂げていく社会の中で、次代を生きていく乳幼児たちは今後自身の身体で直接その場に赴き本物に触れること、直接尋ねる機会が少なくなっていくのではないだろうか。物事をより早く処理することを

求められ、より早く解決にたどり着くことを優先とされていくのである。教育とは子どもたちの学習のプロセスが重要であり、その過程に学びがあることを謳われているが、乳幼児を取り巻く現代社会の環境ではそのことを意識的に保障していかなくてはならない状況である。乳幼児が物事に対して「不思議だな…」とじっくりと心を動かし、追究し続けられる時間が非常に短時間であり、子どもを取り囲む大人たちがじっくりと探求している子どもの姿を見守りきることができないのである。

上記のような現状を踏まえ、人間形成の土台となる重要な時期を保育する保育者たちは乳幼児にどのような環境を提供していくことが望ましいのか改めて考えたい。また、低年齢児期の乳幼児の生活においては「いつもと同じ環境」であることが子どもにとって安心であるとされているが、日常的に決められたコーナーの中で遊び、玩具や道具など遊ぶものも大人に与えられて過ごすことが多い中、将来を見据えた乳幼児に育みたい力が育つ保育、教育の環境として適しているのだろうか、考え続けることが必要であろう。

#### II 問題

非認知能力とは、西坂ら（2017）によると「肉体的・精神的健康や根気強さ、注意深さ、意欲、

TANI, Masayo

北陸学院大学 教育学部 幼児教育学科  
保育内容人間関係、特別支援教育論、乳児保育

自信といった社会的・情動的な性質などのことであり、日本における幼児教育が重視する、心情・意欲・態度と重なる部分である<sup>1)</sup>と示している。また、川畑ら(2021)は「IQなど数値で示される認知能力とは異なり、「学びに向かう力や姿勢」のような「目標や意欲、興味・関心をもち、粘り強く、仲間と協調して取り組む姿勢」を中心としたスキルであるとされている<sup>2)</sup>と述べている。

OECDベネッセ総合研究所による調査報告(2015)では、認知的スキルは高等教育進学、雇用や収入等の面において成功を予測し、社会情動的スキルは精神的・身体的健康や問題行動の少なさなどが予測できるなど2つのスキルが調査対象者の社会的適応に影響を与えることを報告している。<sup>3)</sup>さらに、認知的スキルの状態で翌年の認知的スキルの高さが予測でき、非認知的スキルも同様に示される一方、非認知的スキルの状態から将来の認知的スキルの高さが予測されるという関係は認められるが、認知的スキルの状態から将来の非認知的スキルの高さが予測されるという関係は認められないことも明らかとなっている。

上記により、子どもたちが計算問題や漢字練習等を乳幼児期早期より解き続けて訓練するといった認知能力を直接的に育むことより、友達と多く遊ぶ時間を保障し、遊びに没頭すること、様々な経験による探究心や根気強く取り組む力といった非認知能力を育むことにより、その後の学習において培った非認知能力を生かして意欲的に学習に取り組むことが可能となり、将来社会的に自身についた力を発揮して生きていくことに繋がっていくのであろう。

さらに、幼稚園教育要領解説(2018)の資質・能力及び育てほしい姿において「他の幼児と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことがあることを分かり<sup>4)</sup>また「友達と様々な体験を重ねることを通して人間関係が深まる中で自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。」<sup>5)</sup>ということが明記されていることから幼児期における多様な体験や運動経験により社会情動的スキルや非認知的能力を育むことへの関心の高まりと重要であることの理解が広まっている。

一方で、乳幼児の育ちは環境の影響を受けやす

いため、社会情動的スキルや非認知的能力を育むには、周囲の大人による影響を強く受けながら成長をしていくということを認知している必要がある。養育者をはじめ、保育者らは子どもたちと長時間を共に過ごしており、環境及び関わり方の重要性を意識していきたい。さらには、養育者や保育者自身の育ちの過程における環境や様々な経験をしてきた内容がその人の価値観や保育観に繋がり、自身の子育てや保育にも影響をもたらすものである。

将来、保育者や教育者を目指す学生にも同様のことがいえるだろう。子どもたちの多様な感じ方や学び方を理解していく上で、学生自身の経験が乏しいことには、目の前の子どもたちの姿から自身の経験や感覚と結び付けて考える手段がなく、共感的理解にはつながりにくいといえる。

奥村ら(2005)の大学生の非認知能力と幼少期の体験の因果関係についての研究によると「やり抜く力」「社会的スキル」の2点と自然体験や地域体験との関連が見られ、自然体験や地域体験を幼少期に経験していた学生ほど非認知能力が高いということを報告している。<sup>6)</sup>また、国立青少年教育振興機構による「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」(2021)では、自然体験が豊富な小・中・高校生ほど自律性、積極性、協調性、探求心等の高得点群の割合が大きいことも示されている。<sup>7)</sup>これから子どもたちを保育、教育していく養成課程で学ぶ学生たち自身が多様な場面で心を動かす体験をしていることが重要だといえよう。そこで授業の一環で、学生たちが実際に自然の中で自身の身体と五感を使って自然を体感することを試みた。

### Ⅲ 目的

保育者、教育者を目指す学生たちが自然体験の講師による「自然遊び」を体験し、学生たちが自然と向き合う姿を観察する。学生の実体験から得た発見や気づきから、子どもたちの非認知能力が育まれるような大人の関わり方の質を考察し、保育者・教育者に必要な資質・能力について学生たちの実体験の有効性を検討する。

#### Ⅳ 研究 学生による自然体験

##### (1) 調査対象

20XX年、筆者が担当している「保育内容人間関係」の授業を受講している3年次生、37名である。

尚、調査者は科担当である筆者と20XX年度子ども教育学科4年次生1名（以下、補助学生）である。

##### (2) 調査日時

20XX年11月18日 10:30～14:40（2・3限）

##### (3) 方法

主な授業における体験の流れを以下に示す。

- ① 自然学校外部講師2名（以下Aさん・Bさん）の自己紹介
- ② 北陸学院大学三小牛キャンパス周辺を散歩する。（2限目）

学生は自然学校講師のAさん、Bさんのグループに分かれて散歩をし、講師を入れ替えて再度散歩をする。学生たちは2通りの散歩を体験する。散歩の進め方は以下の通りである（表1）（表2）。

- ③ 自然の中を散歩して感じたことや気に入った自然物などについて討論する。（3限目）

表1 Aさんの散歩の進め方

Aさんの方法	
事前に指示を与えたり、活動範囲を指定したり学生たちの活動に対して敢えて様々な制約を与えるような声掛けと関わりをする。	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・危険についてAさんが事前に伝える。</li> <li>・列になって歩く。</li> <li>・触って良い葉を指示する。</li> <li>・全員に自然物に目玉シールをつける方法を伝える。</li> <li>・歩くコースを計画通りに進める。</li> <li>・テーマ以外のことに興味を持ったなら注意する。</li> <li>・見つけた物を友達と共有する。</li> </ul>	

表2 Bさんの散歩の進め方

Bさんの方法	
比較的学生の自由が認められ、学生と会話をしながら、話や散策が進められる。	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・危険についてみんなで考える。</li> <li>・説明をする際には自由に見える範囲でよい。</li> <li>・自由に葉を選ぶ。</li> <li>・一応目的地があるが、道中の発見に応じて立ち止まり、行けるところまで行って帰ってくる。</li> <li>・テーマ以外でも一緒に楽しむ。</li> <li>・見つけた物を認める。</li> <li>・目玉シールを付けるのはやってみてみたい人がする。</li> </ul>	

筆者と補助学生は、学生たちの2通りの散策に同行し、活動の様子をビデオ撮影し、学生の表情や発話の様子から学生自身にどのような非認知能力が育まれていくか考察する。

##### (4) 倫理的配慮

本研究を実施するにあたり、ビデオ撮影や情報の管理について対象の授業参加学生に対して事前に口頭と書面にて説明をした。また研究協力について同意書にて同意の許可を得た学生のみ情報を使用することとした。

##### (5) 調査結果

2通りの散歩の様子をビデオ記録より抽出し、比較考察をする。

#### 【2通りの散歩による学生の姿の違い】

##### ① 出発場面

###### Aさん

並んで説明を聴いている時は、終始静かであり、隣の学生と話をする様子は見られない。

###### Bさん

Bさんの「崖から落ちんためにどうする？」の投げかけに、学生からは「手を繋ぐ」「前を見て歩く」「山に入らない」「山に入らないよりは崖に近寄らないかな～」などと掛け合いをしながら、学生同士相談したり、話をしたりする様子が見られ、笑顔が見られた。



## 考察

Aさんの説明は危険に関する注意ということで、ユーモアなどは入れずに伝え、学生たちも注意事項を守らなくてはならないという意識からかAさんの説明を聴き洩らさないよう静かに聴いていたと推察する。

Bさんは、注意事項を確認する際に、学生たちへ考えたいことを投げかけたことで、学生たち一人ひとりが自分事として捉えたようで、考えたことを発言したり、隣の学生と話し合ったりする様子が見られたと考えられる。他学生と交流することに繋がり、積極的に体験しようとする雰囲気スタートされたようである。

## ② 自然物で遊ぶ場面

### Aさん

Aさんから「いいなあ、かわいいなあって思う葉っぱを見つけたらAさんのところに持って来て!」と伝えられ、学生たちはお気に入りの葉を探し始めた。

### Bさん

Bさんはハート型の葉を手に取り、「ハートの葉っぱ知ってる? 恋愛成就のおまじないできるよ! 誰かやらない?」と呼びかけた。しかし学生たちからは立候補する学生はおらず、おまじない遊びはできなかった。

## 考察

Aさんは「持って来て!」と学生たちに指示をしていたため、①の出発場面同様、Aさんの言うことを守ろうと思う学生が多かったのか、どの学生も葉を真剣に探していたようである。しかし中には「葉なんて探したくない」という学生もいたであろう。そのような思いの学生も探していたとするならば、ある程度、指示的な声かけがあることは、学生(子ども)が自分の気持ちに折り合いを付けて、皆が(に)同じことをする(させる)には有効といえる。

Bさんは、「誰かやらない?」と学生に選択する機会を与えたことで「やってみようかな」「自分はやりたくない」と参加の姿勢も学生自身で選択することができた。自分の気持ちと向き合い、自己決定できる機会は、このような体験の中で、自身の行動に責任を持つ上でも大切なことであろう。

しかし、今回の学生による体験では、周囲の目を気にして前に出ることに抵抗感があったのか、立候補する学生はいなかった。

## 【2通りの散歩による学生の姿の共通点】

### ③ 自然遊びのエリアに向かう移動場面

- ・道端には草花や落ち葉が多くあったが、自ら興味を示している学生はなく、Aさん、Bさんが紹介する植物や自然物にのみ関心を示している。
- ・AさんやBさんが紹介した植物においても、紹介後その場を離れると学生たちは植物に少し触るくらいで強い関心は示さなかった。

### ④ 自然と触れ合っている場面

- ・植物の数にもより一度に学生たちが紹介された植物に触れることができず、順番待ちをしながら、待ってでも自ら触ってみようとする学生もいる一方で植物に触れている学生の反応を見るだけで自身は体験をせずに次の場所に移動する学生もいた。
- ・自分の近くにある植物に触るのみで他の場所に移動して観察するなど自ら興味を示さず、一定の場所から動こうとしない。

## 考察

③、④の学生の姿がAさん、Bさんの両方の散歩場面で見られた。活動への参加自体に否定的な態度を見せる様子はなかったが、一部の学生たちの姿からは、探求心が弱く、自然活動、自然遊びにおいて興味や関心の低さが表れたといえるのではないだろうか。また、学生自身、幼少期の自然活動の経験の少なさにより、どのように関心を示せばよいか戸惑いがあったのかもしれない。

この点については、得手、不得手は誰にでもあるもので、自然遊びに対して全ての学生に積極的になることを強いることはないが、もし子どもたちと自然の中で遊ぶ機会があるならば、共に活動する大人たちの態度や言動が影響することを鑑みて、無関心ではいられないであろう。

## 【散歩中の学生の発話】

### ⑤ 葉で作った顔を見せ合う場面

出来上がった葉を見て、「かわいくない?」「かわいい」と互いの葉を褒め合う姿や「なんでそんな笑うん?」「みんな象みたいになる」と笑いな

がら会話していた。

Aさんは出来上がった葉を「見せ合いましょう」という声掛けはしていなかったため、学生自身で自発的にこなっていた姿である。遊びながら作ったもの、出来上がったものを通して、「誰かに見てもらいたい」「仲間とおもしろさを分かち合いたい」という気持ちが内から湧いてきたことによる主体的な関わり合いであるといえよう。

### 【学生の討論】

散歩を終え、学生たちが活動の振り返りを行った。主な討論の発言内容を以下に示す(表3)(表4)。

表3 Aさんとの散歩で感じたこと

Aさん
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Aさんとの散歩で計画性と集団行動をする力が育まれた。</li> <li>・ 移動を列になって動くことで集団行動や交通ルールを学んで規範意識につながる。</li> <li>・ ルールの大切さやきまりを守る社会性。</li> <li>・ Aさんを先頭に自然と関わることが乳児や低年齢児に向いているのではないか。</li> <li>・ Aさんとの心の距離を感じて、友達と話す機会が多かったように感じる。</li> </ul>

表4 Bさんとの散歩で感じたこと

Bさん
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Bさんは選択させてくれたので、積極性や自主性が育まれるのでは。</li> <li>・ のびのび行動する力が育つ。</li> <li>・ ポイントの場所で大人が見える範囲で自由に自然と関われることで、五感や興味関心が刺激されて、感性が豊かになるのではないか。</li> <li>・ Bさんが「やってみよう」と言って実際にやっている姿を見せてくれた。子どもの挑戦する気持ちや諦めない心を引き出せる。幼児期後半に。</li> <li>・ 疑問を共有したくなった。</li> </ul>

### 【学生による散歩についての考察】

上記の結果から、敢えて指示を多く示して活動を進めたAさんの関わり方からは主に規範意識や社会性が育つのではないかと捉えた学生が多かった。一方、それぞれの場面での参加に対して自由に選択する機会を持たせたBさんの関わり方からは主に好奇心や自主性の育ちについて多く語られた。それぞれに育まれるであろうと予想した能力は異なっているが、学生たちはどちらも対象年齢や場面に応じて必要に使い分けられる関わりであるとまとめている。子どもたちと関わる際にそれぞれの発達年齢や子どもたちの状況、クラスの特徴などを生かした関わりが重要となることが学生たちの気づきとなっていることが読み取れた。

### 【関わり方の検討】

#### Aさん

- ① Aさんを先頭に学生たちは2列に並び、横断歩道では手を挙げ左右をよく見て渡ることを約束してから散歩を開始する。
- ② 落ち葉がある場所にて、「赤い葉っぱ見つかるかな？競争しよう」「1番匂いのする葉っぱ見つけて。他の人にも嗅がせてみて」と声掛けした場面。

①では、低年齢児期の子どもたちは危険を予測する能力が未熟であり、ルールの理解がまだ難しい時期は、ある程度保育者のほうで伝える必要があるだろう。

また②のような場面は大人の指示ではなく子ども同士で気づきを伝え合い、遊びが次々と発展していくことを可能とする場面である。大人が次々活動を伝えることで、子ども自ら思考する必要がなくなってしまう。一方で、低年齢児はAさんのように一つ一つの声掛けがあることで、新たなものの見え方や捉え方に会おうきっかけがあるかもしれない。

#### Bさん

- ① 「基本自分の身は自分で守ってね」と言って散歩を開始する場面。
- ② Bさんは葉を噛んで吸う姿を学生たちに見せて「美味しいかどうかは、勇気のある人は試し

てみて。」と声掛けをし、学生の一人が葉を吸ってみると、「この葉はスイバっていうよ」「水分補給にいいよ」と葉の説明をする場面。

①の場面では大人が過度に介入しない関わりにより、子どもたちは自分で考える機会を得て、任される責任とそれを成し遂げた時の自信に繋がるであろう。実際に学生たちは、普段自分の通っているキャンパス内の歩いたことがない場所、意識していなかった環境に対して「こんな裏側知らなかった」「いい景色」「こんなところがあったんだ」と周囲の環境に目を向け捉えようとする姿があった。

②の姿からは、吸うことを強制せず学生の気持ちを優先し、学生が興味を持ったものについて「水分補給にいいよ」とさらに関心がわくような知識につながることを伝えていた。実際に葉を吸った学生の周りを仲間が囲み表情の変化や反応を見ようと様子を見守っていた。さらに、仲間に味を尋ねられた学生は「すっぱい…」「でも大丈夫。吸ってごらん」と、感じたことを言葉で表現し、また仲間にも進める姿があり、始めに吸う体験をした学生は、吸うことを躊躇している学生を前に得意そうに語っていた。迷っている学生もまた自身の気持ちと植物と向き合っていた。

活動を通して自分の考えを信じ、思考力や感覚を十分に育みたい幼児期の子どもたちへの大事にしたい関わりであるといえる。

## V 総合考察

子どもたちの社会情動的スキルや非認知能力を育む保育者、教育者に必要な資質・能力について、これから保育者、教育者を目指す学生たちの自然体験による学びや気付きから検討した。散歩の中で、講師の発信により新たに知り得たこと、教えてもらった遊びがうまくできた際に誰かに伝えなくなった気持ち、先へと進みながら景色が変化し何気なく目に止まったものから思わずじっと観察していた姿など、学生たちの姿も様々であり、これらの姿は保育の営み中で見られる子どもたちの姿ともいえるだろう。また今回、活動の中では積極的に自然遊びと向き合うことができなかった学生もいるが、その横で生き活きと山の斜面を登り

次々と虫を見つけたり、実を食べたりしている仲間の姿から、自分にはない力を仲間に見出し、素直に「すごいな…」とつぶやく学生の姿もあった。自然界では、一人ひとりの興味や関心が柔らかく受け止められ、また仲間の多様さも受け入れられるような偉大な力があるのではないだろうか。また、敢えて学生たちへは告げずに二人の講師が相反する関わり方をして散歩の誘導に臨んだ違いにも、学生自身がどちらの関わりの散歩も経験し、自身がその違いを感覚的に感じ取っていたようである。これから保育者、教育者を目指す学生たちが養成課程において自然の中で実体験を通して自身の感覚と向き合い気づく機会があることは、体験後の学生の振り返りからも、乳幼児の感じ方を想像し関わりと対象の年齢を考えることにつながり、有効な体験であったといえよう。

知識で子どもへの声掛けや関わり方を学ぶだけでなく、予測不可能な自然環境の中で、自分自身の心を揺さぶられながら、感覚に向き合う体験が将来、子どもたちと生活を共にしていく際に、思慮深い見守りと子どもの学びをじっくり保障することができる勇気へとつながるのではないかと考える。その時が来た時に自身の「実体験」が子どもの理解の手がかりとなり、子どもがしている事象に対して新たな意味を見出していく力となり得るといえるだろう。

## VI おわりに

本研究における自然体験の散歩では、二人の講師による関わり方の違いの体験をしたが、各実践のどちらを先に体験したかにより、後半の散歩に向かう学生たちの気持ちや雰囲気にも影響があるものと思われる。また今回は散歩に参加するグループについての男女比、グループ構成員の関係性、参加学生の性格などの調整はしていない。今後は、体験時のグループ間の関係性も考慮した調査をしていきたい。

## 謝辞

本研究において、自然体験活動の講師を務めていただきましたお二人の先生方に深く感謝申し上げます。またご協力いただきました学生の皆様にも合わせて感謝申し上げます。

本研究のビデオ撮影並びに調査を吉田千紘さんの協力を得ました。改めてここに感謝申し上げます。

〈引用・参考文献〉

- 1) 西坂小百合・岩立京子・松井智子, 2017, 「幼児の非認知能力と認知能力、家庭でのかかわりの関係」 共立女子大学家政学部紀要, 第63号, 135-142
- 2) 川畑和也・福満博隆, 2021, 「自然学校における子どもを対象とした短期自然体験の教育効果に関する一考察 ―非認知能力に着目して―」 鹿児島大学総合教育機構紀要, 第4巻, 76-83
- 3) 池迫浩子・宮本晃司, 2015, 『家庭、学校、地域社会における社会情動的スキルの育成 国際的エビデンスのまとめと日本の教育実践、研究に対する示唆』 OECD Education Working Papers, No.121. OECD Publishing, OECD, ベネッセ総合研究所(訳), 2015, 14頁
- 4) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』, フレーベル館, 2018, 60頁
- 5) 前掲4)
- 6) 奥村咲・池田琴恵, 2020, 「大学生の非認知能力と関連する幼少期の体験の検討」 東京福祉大学・大学院紀要, 第10巻, 第1-2合併号, 157-164
- 7) 国立青少年教育振興機構『青少年の体験活動等に関する意識調査(令和元年度調査)報告書』, 2021, 3月, 218, 81頁, 96頁
- 8) 厚生労働省『保育所保育指針解説』, フレーベル館, 2018
- 9) 厚生労働省・文部科学省・内閣府『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』, フレーベル館, 2018

